
ポケットモンスターの可能性

yugata

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ポケットモンスターの可能性

【Zコード】

Z8394V

【作者名】

yugata

【あらすじ】

機械とは本当に奇怪である。プログラム通りに動いているので人間の言つことは聞かない。しかし、たまに人間の言つことを聞く機械もある。その不思議なことを踏まえての不思議なポケモンの物語

ものがたりのものがたり（前書き）

ツヤガ「はい。こんにちは。私は作者代理です。詳しいことは他の小説で。今回は友人がポケモンの小説を書けばどうたらと言つてたのでお試しに書いてみました。この小説が続くのか分かりませんがよろしくお願ひします」

ものがたりのものがたり

主人公「また最初からか」

ゲームの主「ポケモン」って最初から始めると何故か飽きずに楽しめるんだよな」

「JRの世界は」キドキ一オ

いつも通り台詞はスキップされる。そして名前が決まぬゲームの主「どうしようかな」

主人公（またレッドとかサトシはなるのか）
ゲームの主「ん」。今回は、これでいこう。クズお

ケーブルの主幹だな」
今日はこれまでいこう。ケーブル主人公

だが、その瞬間アドバンスの電源が切れる

ゲームの主一！？あれ。つかないそ

クーズ「なんだ? バグか。
クーズは無いだろ」
これで操られなくて楽だな。 ていうか

あ・・・あ、あ。これで喋れる
か。デハハナソウカ

クーズ「さつきまで片言じゃなかつたよな！？」

ウルサイ。ダマレクズ

クーズ「クズじゃない。クーズだ」

クズ、ハナシラショウ。オマエガクリアシナイトコノゲームハナオ
ラナイ。イヤ、オワラナイトイツタホウガイイカ

クーズ「何を言つてるんだ！」

イツカワカル。ソレマデテキトニーガンバレ。クズ

そして急に消えた

クーズ「・・・とにかく最後までクズ呼ばわりだつたな」

急に周りが明るくなる。そこは見慣れた、このゲームの主人公の部屋

クーズ「やるしかないな」

いつもは主に操られて動くクーズだが今回は自分の意思で動ける

クーズ「じゃあ早速きずぐすりを・・・！」

ボックスにはハイパーボール999個だけが入っていた

クーズ「・・・」

謎の人物「クーズ。朝御飯よ」

階段を上がってきたのはお母さん、ではなかつた

クーズ「…誰だ。テメー」

謎の人物「あら、酷いわね。貴方の母親の、マグマ団のしたつぱ（女）じゃない」

外見は、主人公であるクーズと同じ歳くらいだ

クーズ「（…そうか。今はバグでこの世界が壊れてるのか。だからつて、これはないな）」

ゲームの主は様々なポケモンシリーズを同時にやっていたのでゲームが他のシリーズのゲームを覚えていたのだろう。それはクーズも同じであった

クーズ「しょうがない。バッグの中でもクリアしなくちゃな」

母親？「クーズ。昼飯出来たわよ」

クーズ「はやつ！まだ朝御飯も食べてないよ」

クーズ「しかし、いつもだつたら草むらに入ればオーキド博士が来るが」

そもそも草むらがない

クーズ「どうするか。せめてポケモンを持つてないと

持ち物はハイパーボールが99個ある

謎の人物「おい、クズ。ポケモン貰つたんだからバトルしようぜ」

クーズ「（まさか、）の声は）・・・グリーンか

グリーン「よう。バトルは知つてるだろ？よし勝負だ！」

グリーンはライバルの名前だ。何故かグリーンになつている

クーズ「ポケモンが居ないんだが

オー・キド「こいらー！ポケモンを持つてないのに草むらに入るんじやない。・・・む。まだまだじやの。もっと草むらに入つて色々なポケモンを探すのじやな」

クーズ「オー・キド博士！しかも台詞がいつも混ぜ

グリーン「俺はチャンピオンになつたんだよ。見せてやるぜ。最強の俺様を！」

クーズ「くつ。突つ込みが追い付かない。だつたら）」

逃げるコマンドを選択した

マサラタウンに居たがトキワシティに逃げた

クーズ「はあはあ。疲れた」

一気に駆け抜けたので息切れしている

クーズ「ランニングショーツは無いのかよ」

「ピッチュ！」

クーズ「？」

「ピッチュ、ピッチュ」

下から鳴き声が聞こえてくる

クーズ「この鳴き声は確か」

ピカチュウの進化前、ピチューだった

クーズ「凄いな。カントーなのに色々なポケモンが出るのか。よし、早速GETだぜ」

手持ちいっぱいのハイパーボールを投げまくる

しかし、全て避けられる。そして、でんきショックを喰らって上手に焼けましたー！！

クーズ「くつそ。せめて手持ちにポケモンがいれば・・・？」

いた。いつからいたのか知らないがいた

クーズ「ドジョウ・・・だと・・・（水、地面、だからピチューには

有効だが何故ドジョッチを選んだんだ、このバグゲーム）

クーズ「考へても意味ねえな。いけ！ドジョッチ！」

「ドッ・・・ドジョ」

クーズ「水（泥沼）がないから死にそうだ――！」

そんなドジョッチにピチューはでんきショックを放つ。もちろん効果はない

クーズ「くつ。とりあえず、ドジョッチ どろばくだん！」

あのハイパーボールを避けたピチューがドジョッチのどろばくだんを喰らつた。泥が目に入り命中率が下がる

クーズ「よし、そのまま。みずてつぽう」

体中の水分を頑張つて集めて圧縮した水を放つ

「ピチューーー！」

でんきショックでみずてつぽうに応戦した。だがドジョッチの勝ちだつた。しかし威力の落ちたみずてつぽうを利用してピチューは目を洗つた

クーズ「今だ！」

すかさずハイパーボールを投げる

ピッ ピッ ピッ

ポン

クーズ「よっしゃ。ピチューを捕まえたな」

ボールを持ち一度出してみる

「ピチューーー！」

出てきた瞬間、クーズの腹にダイレクトアタックを決める

クーズ「うひぐ・・・こひ」

こんなやつたりをしている間にデジヨウチは、どんどん弱っていく
た

ものがたりのものがたり（後書き）

ツヤガ「早速、キャラ設定！！」

クーズ（男）

見た目は赤、緑、青の主人公。名前をレッドにしようかと思つたが、なんとなく止めた。（ライバルはグリーンなのにな）性格はアニメのサトシに近付けようかと

クーズ「しかし、ライバルは完全に俺のことクズって言つたよな」
ツヤガ「まあ、いいじゃですか。クズなんだし」
クーズ「はー？俺はな。ゲーマーであるゲームの主に何回も操られながら何回もチャンピオンになつたんだぞ」
ツヤガ「そうですか。まあ、そうですか」
クーズ「（こいつ、ムカつくな）」
ツヤガ「それではこの辺で。ばいばい」

ものがたりのポケット

クーズ「ドジョウツチー！！」

今、ピチューをボールによく入れたがドジョウツチが干からびて
いる

クーズ「早く。ポケモンセンターに」

だがポケモンセンターの場所を見た瞬間、固まつた

そこには、ポケモンジムがあつた

クーズ「（あれ？トキワは最後のジムだつたよな。え？じゃあジム
があつた場所は）」

ポケモンセンターがあつた

クーズ「あ〜。入れ替わってるのか」

そして入れ替わったポケモンセンターに入る

謎の人物「よく來たな。クーズよ。お前は私を何度も魔す」

ブーン（ドアを開けた音）

クーズ「なるほど。あれはジムだつたのか。サカキが何か言つてた
が無視だな。そうなるとジムの形したポケモンセンターが本物か」

ジムに行く。だが開かない。原作ではジムリーダーが留守で開かない。そう、だから、こちらも開かないのだ

クーズ「・・・回復出来ないんですけど」

だが幸い草むらが無いので野生のポケモンには会わない

クーズ「ん？待てよ。このバグゲームなら酔っ払いのオジサン居ないんじゃないかな？」

いつもいる場所を見る。そこにはポケセンの受付のお姉さんがいた

クーズ「え？・・・回復出来るんですか？」

ジョーイ（名前合ってる？）「はい。」^{うひうひ}「ポケモンを渡して下さい」

クーズ「あ、はい」

てん、テン、テロリーン

ジョーイ「はい。皆元気になりましたよ」

クーズ「（浮いてたよな。ボールが浮いたよな）」

バグで機械は見えないらしい。だから浮いたように見えたのだ

クーズ「このゲーム。本当に大丈夫かよ」

そして次の目的地トキワの森に入る

クーズ「！？」

目の前から飛んでいる大量のむしとり少年が来た

クーズ「…何これ。とにかく逃げるーー」

ゲーム説明：上から来るむしとり少年を避ける。自分が移動出来るのは右か左だけだぞ。むしとり少年は早い奴や遅い奴がいる。惑わされずいこう

クーズ「ふう。別ゲームになつたな」

難易度は低かつたので問題なくクリアした

そして「ビシティに着いた

クーズ「流石にポケモンのレベルを上げないとタケシには勝てないよな」

だがトレーナーも野生ポケモンも居ない。いや、トレーナーは居たが

クーズ「…いい」と、考えた。こい、ピチュー」

出てきてまたダイレクトアタックをする。が、今度はクーズに止められる

クーズ「よし。これで何もできまい」

ピチューを両手でしっかりと握りしめている。どちらかが「ゴム手袋をして
いる

クーズ「ピチュー。お前は何処から来たんだ？」

「ピチコ、ピチコー」

卷之三

なんとなく放した

じつかりひき上を指してこねりこねり

クーズ「上から来たつて。どこのラビ
タだよ」

「ピチヨ！ピチヨ！」

怒っているようだ

クーズ、怒られてもな。どうするんだよ」

カイリューに乗つてやつてきた

謎の人物「H A - H A、H A ! よつ、皆のヒーロー。ワタルだよ」

クーズ「・・・（なんか、来た～）」

ワタル「いや～。クズ君久しぶり。いつもカイリューがやられてたよ。全く、君は強いな。HA-HA、HA！」

クーズ「（ワタルさんがキャラ崩壊してるーーー）えっと、どうしたんですか」

ワタル「空に行きたいのだ。任せなさい。私が連れてつて上げよう」

クーズ「え？ なんで？」

問答無用でカイリューに乗せられ空に向かう

ワタル「クーズ君は知らないかもしれないから話そつか。今、このゲームはバグを起こしている。ゲームの主がゲームを出来ないから、皆、自由に動いているのだよ」

クーズ「（建物も自由に動いてたな）」

ワタル「だから、私がここにいるのだ」

クーズ「へ～。そうなんですか」

ワタル「では、頑張つてくれたまえ。私は、まだ旅をするからな」

カイリューに乗つて何処かへ行つた

到着したのは、あたり一面、白いタイルみたいのが敷かれている雲

の上だつた。柱が何本か立つてゐる

クーズ「これは・・・?」

「よく来たな。クーズよ」

クーズ「誰だ!（脳に直接話しかけられる感じ。ポケモンか）」

「我的名はアルセウス。神だ」

クーズ「アルセウス!!（まさか…ピチューはアルセウスによつて作られたポケモンなのか）」

「違う。そのピチューは可愛かつたから、せりつてきたのだ」

クーズ「心読むな。そして神なのにさらうなよ!（へんだ、あの首飾り）」

「可愛かつた」

クーズ「いや・・・知らないから」

「まあいい。我と戦いに来たのだる?」

クーズ「目的は、よく分からぬが、そつだと悪いぜ」

「では、始めるか。そつちはピチューとジジョッチを出すのだな」

クーズ「最初から、そのつもりだ。いけ、ピチュー・ジジョッチー・

相手は神と言われているポケモン。恐らく、ピチューとジョッチで倒せる相手じゃないな。だが勝算はある

ものがたりのポケット（後書き）

ツヤガ「あれれ。もうアルセウスが出ちゃった」

クーズ「いや。その前にピチューとドジョウチじや倒せないだろ」

ツヤガ「最後に 勝算はある って言ったから多分平気だよ」

クーズ「それならいいけど」

ツヤガ「感想とかテキトーに待つてまーす」

ものがたりのモチーフ

クーズ「よし、ピチュー。でんきショックー・ドジョッヂ。どうぞく
だん」

一匹の攻撃がアルセウスを襲う

「そんな技喰らわないわ！！」

ハイパーボイスで一人の攻撃を無効化する

クーズ「やつぱり。無理か」

「今度は、こちから行くぞ！！」

「ドジョー・・・？」

ドジョッヂに向けて、あくびせつだんが放たれる。しかし、ヌメヌ
メしてこむドジョッヂは滑って当たらなかつた

クーズ「えー……ドジョッヂ有り得ないだろ。・・・いや、チャン
スだ。ピチュー、わるだくみ」

「ピチュー、ピチュー」

「ドジョッヂ、」とわざとならば、はあ……」

ときのまつりがドジョッヂを狙つ。だが同様に避けられる

クーズ「ドジョウチがここまで時間を稼いでくれるとか

その間にピューはわるだくみを、やりまくる

「ならば、見せてやるわ」

アルセウスの色が緑色に変化する

「喰らえ……」

クーズ「……ドジョウチ」

アルセウスが使った技はリーフストーム。水、地面のドジョウチは一撃だらつ

クーズ「とびけーー！」

走ってドジョウチを助けようとすると。だが間に合いそうにない

クーズ「くそ。・・・ー？」

突然、足がバグを起こす。そして戻った時には

クーズ「ランニングショーズ！！よし、これなら

靴の力を借り早くなつたクーズはドジョウチを捕まえる

「ドジワー。」

しかし、滑つて手から飛び出る。そしてクーズがいる場所にアルセ

ウスのリーフストームが炸裂した

「よく、死ななかつたな。クーズ」

クーズ「危ないな！死ぬかと思つたぜ」

驚異の身体力でリーフストームを避けた。だが服は切れている所が多い

クーズ「（緑になつた瞬間リーフストームか。恐らくタイプを変えたな。確かアルセウスのタイプを変えるにはプレートが必要なはず）」

「ピチュー・ピチュー！」

わるだくみで特攻が最高レベルになつた

「ふむ。ならば倒すのみ！」

色が黄土色になる

クーズ「やばい。あれば地面タイプ。ピチュー。避ける！」

だいちのちからがピチューを襲う

クーズ「ドジョウッチ。マグニチュードー！」

「ドジョウー！」

クーズ「（これでアルセウスの攻撃を粉砕するしかない。あとほマ

グニチュード次第だ)」

マグニチュード

10

クーズ「よし、いけ――!」

アルセウスのだいちのちからと、マグニチュード10がぶつかる。だがアルセウスのだいちのちからは防げなかつた

クーズ「ピチュー――!」

だいちのちからで吹つ飛ばされる。クーズはピチューをナイスクヤツチした

クーズ「ピチュー! 大丈夫か?」

「ピチュー・・・」

弱つているが、まだひんしではない

「!?. いくらドジョウツチのマグニチュードで弱くなつたといえ、ピチューが耐えただと」

クーズ「・・・はつ! そつか。アルセウス! お前がだいちのちからの前に使つた技を思い出せ」

「我が使つた技。そつか、リーフストームか」

リーフストームは強力な技だが使うと反動で特攻が下がる

クーズ「ピチュー、頑張れ。お前が居ないと、この勝負勝てない！」

「ピチュー……」

空元氣だらうが元氣を出した

「面白い。ならば本氣を見せてやるわーー！」

空氣が変わる。今まで封じていた力が解放される

「一撃で終わらせよう。はああーー！」

クーズ「わざきのつぶてか。ピチュー、わざきのつぶてに向かって、
でんじは」

「ピチュー……」

わざきのつぶてに電氣が混じる

「我的攻撃を強くして、どうあるのだ」

クーズ「これはドジョウチなどのヌメヌメの奴を確實に捕まえられる手袋！」

「どこから取り出したかしらないが手袋をした

クーズ「ピチュー。ドジョウチ。いくぞ」

ピチューを抱え、ドジョウチを掻む。そしつ、せばきのつぶてをギリギリまで近付けてジャンプをして上に行つた

クーズ「よし。ピチュー。俺たちに、でんじはだ」

「ピチュー？」

クーズ「大丈夫だ。俺を信じろ」

自分たちでんじは、がかけられる

「なるほど。我的攻撃にしたでんじはは、今やつたでんじはと違つ電極か」

クーズ「さうだぜ。これで俺は浮く！――」

反発力により高く浮いた

クーズ「よし、こっنان――！」

ハイパーボールをアルセウスに投げる。その瞬間

クーズ「ピチュー。フルパワーのでんきショック！ドジョウチ、みずてつぽう！」

アルセウスはハイパーボールを避けた、すぐでありピチュー達の攻撃に反応が遅れた

「だが、まだ甘いな」

アルセウスの色がまた縁になる

クーズ「草タイプ。くそ。でんきも水も効きにくい（あのタイプ変化を止めないと）」

一匹の技を合わせた技はあまり喰らわなかつた

クーズ「だつたら。ピチャュー、でんじは。デジヨッチ、みずあそび」落_下しながらだが命令をする。みずあそびで範囲が広がつたでんじはがアルセウスに当たる

「ぬうう」

クーズ「（あのタイプ変化はプレートによるもの。だつたら何処かにプレートを持つてゐるはず）」

「デジヨー..」

デジヨッチの尻尾がクーズの首に当たる

クーズ「あれか！！」

首飾りをアルセウスはしていたが、そこにプレートがあつた

クーズ「（・・・俺が取りに行くしかないな）デジヨッチ、ピチュ！。俺を背中から叩け！！」

「デジ四...」「ピチ四...」

一匹の尻尾に思いつきり叩かれる。そして、加速してアルセウスに近付く

「でんじは、！」とき...」

アルセウスは力で、でんじはを無理矢理、解除した

クーズ「もうつたー...」

アルセウスの首飾りを掴む。落下したスピードがあるので首飾りは簡単に外れた

「！？首飾りを」

クーズ「よし。ピチュー...デジヨッчиー でんきショック、みずのはじう

「デジ四...」「ピチ四...」

一匹の技が同時に放たれみずのはじうの輪にでんきショックが混ざる

「ぐわああ

わるだくみでフルパワーのでんきショックと、みずのはじう、ガアルセウスに直撃する。そしてアルセウスは倒れる

ドーン...」

クーズ「いつて——！——！」

かなりの距離から落ちたが主人公の補正で平氣だつた

クーズ「やべー・ピチュー・ドジョッチ」

一匹は、まだ落下している。だが落下地点はクーズの所だ

クーズ「嫌な。予感しか——！」

ピチューとドジョッチがクーズに体当たりをする

「ピチュー！」

ピチューは元氣そうだ。ドジョッチは、みずのはどう、を使い干か
らびそうだ

「よく、我的分身を倒したな」

クーズ「へ？ 分身」

立ち上がったクーズの目の前にアルセウスがいた

クーズ「わあ！ びっくりした。それより分身つて」

「ああ、そこで寝てる奴は我的分身だ。流石に本物の我と戦つたら
勝ち目はないからな」

クーズ「はあ。なんだよ。本物に勝つたと思ったのに——」

「まあ、あれだ。これは【神々の遊び】だ」

神々の遊びと言ったところは、いつのまにか復活したアルセウス（分身）とタイミングを合わせて演技しながら言った

クーズ「・・・そうか。あ！今、気付いたが俺はどうやって戻るんだ？」

「我的力を使えば簡単だ。その前にポケモンを回復させよう」

アルセウス戦で傷付いた一匹が回復していく。（ピチューは傷が治り、ドジョッキは潤いが戻る）

「クーズ。これからお前には様々な困難があるだろう。だが負けるな。全てが終わった時に後悔しないようにな」

クーズ「え？ ちょ、まつ」

「神は乗り越えられる試練しか与えないか・・・。我ながら良いことを思ついたな」

（一矢シティー）

クーズ「あいつら話聞かねえな。・・・よし、ジム戦に行くか

ものがたりのモチル（後書き）

ツヤガ「特攻とか下がるのは関係してきますね。もちろん上がるのも」

クーズ「ドジョウッチ。ありがとな。お前のヌメヌメが無かつたら負けたぜ」

ボールの上から撫でる

「ピチューーー！」

勝手にボールから出てクーズの腹に体当たりする

クーズ「いって・・・なんだよ。ピチューー」

ツヤガ「（やきもちかな？）」

「ペッ！」

拗ねたピチューだった

ツヤガ「気にしちゃ駄目なんだろうナビ、又メヌメで特殊攻撃つて避けられないよね。まあ、気にしちゃ駄目なんだろうけどさ」

クーズ「最初から気にしちゃ駄目って言えよ」

ツヤガ「ピチュー、でんきショック！」

「ピチューーーー！」

クーズ「ピチュー、お前・・・」

バタツ

ものがたりの長寿（前書き）

ツヤガ「あ～、暑い。夏は暑いよ。今回の話に燃えるって書いてあります。夏がさらに暑く感じるかもしませんね～（ないか）」

ものがたりの長寿

クーズ「・・・またポケセンと入れ代わってるのか」

トキワと同じでジムとポケセンが入れ代わっている

クーズ「！そだ。博物館行こう

（博物館）

受付「入場するには一人、500円払ってください」

クーズ「（なんで、ぼうそうぞくが受付なんだよ。しかも地味に高くなってるし）はい。500円です」

受付「あ～、ポケモン一体につき追加で100円です」

クーズ「流石にそれは・・・」

受付「なんだと……やんのか、『ゴラア』」

クーズ「・・・ポケモン勝負ならやりますよ

受付「ほ～、小僧、この前世ポケモンチャンピオンと言われる俺とするのか？」

クーズ「（前世なんだ）いいですよ。強い相手の方が燃えます」

（移動）

審判「では、両者位置にー。」

クーズ「（なんでタケシが審判なんだよ。ジムは、どうしたー。）」

タケシ「ルールはそれぞれ一体ずつの一一本勝負。では、始めーー。」

受付「いけー！ホウオウーーー！」

クーズ「ピチュー、お前に決めたー。」

「ホーホー」「ピチュー。」

受付はホウオウと「一」をクネームのホーホーを出した（一度は考
えるネタだよね）

受付「こいつからいくぜーーー。ホウオウ、たいあたりー。」

前世ポケモンチャンピオンと言われてるだけ、ありかなりのスピードだ

クーズ「ピチュー、避けてから、でんきショック！」

「ピチュー。」

ホーホーのたいあたりをジャンプしてかわし、でんきショックを放つ

受付「甘いな。ホウオウ、とっしん」

たいあたりの時より速い動きでピチューのでんきショックを避け、落下してきたピチューを攻撃する。空中で何も出来ず喰らつ

クーズ「ピチュー！」

受付「カスだな。・・・・？」

ホー ホーが麻痺している

クーズ「そうか、ピチューの特性、せいでんきか！。よし、ピチュー
ー今だ。でんきショックー！」

ホー ホーは麻痺で動けない

受付「ハハハ、まだだ。ホウオウ、サイコシフトー！」

クーズ「なにー！」

サイコシフトは自分の状態変化を相手に与す攻撃である（特性のシンクロと一緒）

「ピッ、 チューー！」

でんきタイプのピチューは麻痺くらいなら平気だった。そしてホー
ホーに攻撃が当たる

受付「！？なりば。ホウオウ、ねんつき」

「ホオーーー！」

超能力によりピチューが浮き何度か地面に叩きつけられる

クーズ「（）のままじゃ、ゴリ押しされる。どうにか……」

タケシ「クーズ君。元ジムリーダーから聞いたことがある」

クーズ「え？」

タケシ「ポケモンに不可能はない。いくらだって強くなれる。可能性は無限大だ」

クーズ「……。ピチュー！お前ならできる。十万ボルト……」

「ピチュー……！」

受付「ホウオウ。負けるな！エアスラッシュ！」

今、二匹の技がぶつかり合い爆発を起こす

クーズ「ピチュー！」

受付「ホウオウ！」

煙が全て引いた時

タケシ「勝者、クーズ」

クーズ「よっしゃあ！ピチュー。うげふ」

抱きつこうとしたが蹴られた

受付「ちつ。しおりがない。バトルに負けたからポケモンの代金は無しだ」

謎の人物「コラアーバイト！なにをサボつてんんだ」

受付「やべ。見つかった」

博物館の係の人「すいません。このバイトが、なにか、やらかしたようだ」

クーズ「いえいえ。こちらもバトル出来たのでいいですよ」

博係「なにーそんな」としてたのか！！」

受付「まあ、いいじゃねえかよ。気にすんな」

博係「バイトのくせにうるさいー本当にすいません。御礼と言つては、なんですが、これを」

クーズ「これは・・・」

みずみず玉を貰つた

博係「これは水タイプに持たせると喜びます」

クーズ「（喜びふ・・・）」

博係「では」

バイトの受付と一緒に博物館に帰つた

クーズ「あー、タケシさん」

タケシ「ん? なんだい」

クーズ「さつき、元ジムリーダーって」

タケシ「ああ、それか。これは一時間前に起つた出来事だ」

タケシ「挑戦者か?」

謎の人物「いや、侵略者だな」

タケシ「!?」

タケシ「気付いたらジムの外さ」

クーズ「(侵略者か) じゃあ今からジムに行くから一緒に行きますか?」

タケシ「そりだな。さつきは何も出来なかつたから今度は、あいつらみたいに追い出してやるか」

クーズ「あー、そうだ。ドジョウチ」

ボールからドジョウチが出てくる、もちろん地面なので時間が経てば死ぬだろう

クーズ「ドジョウチ。みずみず玉だぞ」

ドジョウチに持たせる。すると潤いが出てきた

「ドジョウ...」

クーズ「おー元氣でたでた。これでドジョウチは地面でも平氣だな

タケシ「じゃあ、ポケセン寄つてから行くか」

ものがたりの長寿（後書き）

クーズ「ピチュー。なんで抱きついちゃ駄目なんだよ」

「ピッ、ピチュー。」

クーズ「？分からん」

ツヤガ「ピチュー、こっちにおいで」

「ピチューーーー。」

ツヤガに抱きつく

クーズ「（あれか、ピチューはオスなのか）」

ものがたりの軸

クーズ「（ポケセンがジムだと迫力ないな）」

そんなことは気にせずジムに入る

謎の人物「あれ？」今、ここは私達、【デフェク団】の物ですよ。
勝手に入つて来られては困ります」

タケシ「何を言つている！－ジムリーダーの交換は正式な物が」

謎の人物「黙れ。 いんだよ、 侵略したから」

クーズ「だったら、 侵略し返せばいいんだな？」

謎の人物「へー。 お前、 僕に勝てるとでも思つてんの？」

クーズ「やつてみなきや。 分かんないだろ？」

謎の人物「ハハハ。 いいだろ。 僕の名前はグストだ」

クーズ「俺はクーズだ」

タケシ「では、 両者位置に！」

今、二人の戦いが始まる。 果たして結果は、どうなるんだ

グスト「いけ、 デンリュウ！」

クーズ「ジヨウチーお前に決めた」

グスト「（水、地面か。相性悪いな。だが）デンリュウ、シグナル
ビーム」

クーズ「ジヨウチ、避ける！」

ヌメヌメ補正で地面を滑りながら移動する

グスト「シグナルビームを右、左、真ん中の順に撃て！」

右に撃ちジヨウチが止まり左に行こうとする。そこにまたシグナ
ルビームが来てジヨウチは混乱して動きが止まる

クーズ「くつ。ジヨウチ。シグナルビームに、みずのはどうー。」

だがジヨウチが放つ前にシグナルビームが当たる

グスト「まだまだー！テンリュウ、ほのつのパンチ！」

ジヨウチにテンリュウが近付く

クーズ「ジヨウチ、マグニチュードで応戦だ！」

「ドジワー。」

グスト「ジャンプでかわせーー！」

「テンー。」

ジャンプでかわす

クーズ「よし、今だ。 デジヨウチ、みずてつぱりー。」

クーズは避けることを計算に動いていた

グスト「ククク・・・ハハハ！－テンリュウ、ドレインパンチ－－！」

クーズ「なに－－。」

またグストも裏の裏を読んでいた。 みずてつぱりで火を消された逆の腕でドレインパンチを使つ

「デジ四－－。」

クーズ「デジヨウチ－－。」

タケシ「デジヨウチ、戦闘不能

クーズ「くわ。 デジヨウチ、ありがとな」

デジヨウチをボールに戻す

クーズ「次は、こいつだ。 じい、ピチューー。」

「ピチュー。」

グスト「はあ？ デジヨウチとか出してる時点でおかしこと思つたが進化させとけよ」

クーズ「うるせえ。まだ始めて数時間しか経つてないから、しょうがないだろ」

グスト「まあ、この程度なら即行で倒せるな。デンリュウ、シグナルビーム！」

クーズ「避けてから、でんきショック」

シグナルビームを避け、デンリュウにでんきショックが当たるが、あまり効いていない

グスト「ショボいなー。デンリュウ、パワージェムー！」

無数の岩がピチューに向かって飛んでくる

クーズ「パワージェムと自分に、でんじはー！」

アルセウス戦で身に付いた電気の力を利用した技である

グスト「だつたらパンソコウ、ほのうのパンチー！」

クーズ「（くつ、ピチューじゃ有利な技がない）ピチュー！十万ボルト」

グスト「待つてたゼー！デンリュウ、じゅうでん！」

クーズ「！？」

デンリュウは、ほのうのパンチを直ぐ止め、ピチューの十万ボルト

を吸収した

グスト「よし。デンリュウ、かみなりパンチ！」

「ピチューーー！」

グスト「（）のままじゃ、負ける）」

グスト「終わりにするか。デンリュウ、かみなりーー！」

「テーンーー！」

クーズ「ピチューーー！」

かみなりパンチで吹っ飛ばされたばかりで反応できない。かみなりはピチューに当たり煙を大量に出した

グスト「ハハハ、俺の勝ちだな」

だが明らかにおかしい。何か音がしている

クーズ「?なんだ、このパチパチする音は」

煙が少し引いたところで正体が分かる

グスト「電気がーー？」

そこには、電気を抑えきれないピチューがいた

クーズ「（なんだ、この感じ）ピチュー、十万ボルトーー！」

「ピッピピピピピピ！」

グスト「『テンリュウ』、じゅうでん！」

「『テン！』」

じゅうでんでピピピピピピピの十万ボルトは吸収されるが、ピピピピピピピの十万ボルトは止まらない

グスト「（くつ、このままだと）」「

クーズ「よし、一気に畳み掛ける！」

さうにピピピピピピピの十万ボルトの威力が上がる。『テンリュウ』は全て吸収できず十万ボルトを喰らう

タケシ「『テンリュウ』。戦闘不能！」

グスト「（あの威力。なかなか面白いな）審判、俺の手持ちは、もういらないから俺の負けだ」

クーズ「おい、まで

だが無視してジムを去っていった

タケシ「あのグストって奴、まだボールを持っていたな

クーズ「え？ じゃあ、さつきのは

タケシ「何かの理由で嘘をついたんだろう?」

クーズ「あ、ピチュー」

ピチューは倒れていた

タケシ「！ 酷い熱だ。早くポケセンに連れていく！」

ものがたりの軸（後書き）

ツヤガ「毎回、みんな覚醒していくよ～。これじゃ相手が可哀想じ
やん」

クーズ「じゃあ俺の手持ち増やす、しかないでしょ」

ツヤガ「それがね。ポケモンを何にじょうか迷つてるんだよ。全員
出れるから選択肢が多くて」

クーズ「カツコいいポケモンを希望…」

ツヤガ「もちろん。あまり使われないポケモンを使うよ

クーズ「（それってカツコ良くも強くもないよな）」

ものがたりの歓喜

ジョーイ「今は安定していますけど、このピチューは、どうしたんですか？」

ピチューをポケセンに連れていきジョーイさんに診てもらつた

クーズ「実はカクカクシカジカなんです」

ジョーイ「……なるほど。一度ピチューの精密検査をしてみませんか？何か分かるかもしれませんし」

クーズ「そうですね。よろしくお願ひします」

タケシ「クーズ君。俺はジム関係で色々あるから帰るね」

クーズ「あー色々ありがとうございました」

タケシ「なに、大したことないよ。じゃあね」

クーズ「（このバグゲームでも良い人いるんだな）」

（敵陣）

グスト「だから謝つてるだろ」

謎の人物A「謝つて済む問題じゃない」

謎の人物B「キヤハハ。流石、問題児ね」

グスト「んだと…！」

謎の人物C「あわわ。落ち着いて下さい」

グスト「ちつ。覚えておけよ、752」

752「ええ、いいわよ。貴方がカスだつてことを覚えるわ」

グスト「やっぱ、今から殺す…！」

謎の人物A「二人とも止める！あの方に報告するぞ」

二人とも急に黙る

謎の人物A「で、グストは何か分かつたのか？」

グスト「ああ？・・・そうだな。分からないと言つておくさ」

謎の人物A「…まあいい。今度から自重して行動しろ」

グスト「へいへい」

（ポケセン）

クーズ「ありがとうございました」

ピチューの精密検査でしたが結局何も分からなかつた（健康体だつ

(た)

クーズ「よし、次はハナダシティのジムだな」

「三番道路」

クーズ「ピチュー、十万ボルト！！」

「ピチュー……」

ポケトレ（女）「私の可愛い。ミズゴロウがー？」

クーズ「（原作と、かなりポケモンが違つて楽しいな）」

無事にお月見山の手前のポケセン着いた

クーズ「よし、トレーナーがいたからレベル上げも、そこそこ出来たな」

だがポケセンの前に人影ならぬポケ影がある

クーズ「あのシリエットは？」

「・・・カモ」

クールなイメージのカモネギである

クーズ「（カモネギさんだ―――嘘だろ。あのカモネギさんが！
！）」

そこまで褒めることもないだろ？

クーズ「よーし。早速ゲットだな。お前に決めたピチュー……」

「ピチュー！」

出てきた瞬間カモネギが動く

クーズ「…? ピチュー。避ける」

だがカモネギの動きが読めず、れんぞくぎり、を喰らつ

クーズ「でた！ カモネギさんの、いわくじう、からい、れんぞくぎり、コンボだ！」

どこのカードゲームのキャラの台詞をパクっているクズを無視してピチューは、でんじば、を放つ

「…・カモ」

しかし、いわくじう、で早くなったカモネギに攻撃が、なかなか当たらない

「ピチュー」

そしてピチューは怒った

「ピチュー……」

まずクズを焼き焦げにする

クーズ「ピチュー・・何故・・・」

力モネギもピチューの殺氣を感じたのか構える（ネギを鞘に収めた感じ）

ピチューも対抗して構える（ほっぺを詰まんでいつでも放電できるようになります）

二人とも構えて動かない。だが沈黙の間に終止符が打たれる

風が吹いた

ピチューと力モネギが同時に動く

「ピチュー！」
「力モ！」

ピチューの十万ボルト、力モネギの、いよいぎり

先に体が地面についたのは・・・

ピチューだった

だが力モネギもその後、直ぐに倒れた

クーズ「！？力モネギ捕まえるチャンスだ！」

何故か復活したクーズがハイパーボールを力モネギに投げる

ポン ポン ポン

ポポボボン

クーズ「よつしゃ。カモネギGETだぜ！！」

何か変な音がしたが気のせいだろう

クーズ「今、気付いたけどポケモン図鑑がないな」

何故か、カモネギを捕まえて思い出した

クーズ「じゃあ、早速」

「・・・カモ」

クーズ「よろしくな。カモネギ」

「・・・ピチュー！！」

倒れてから放置されていたピチューが怒りクーズにまた十万ボルトを喰らわせる

クーズ「ピチュー。少しば、なつけ・・・グタ」

「・・・カモ」

「ピチュー」

ものがたりの歓喜（後書き）

ツヤガ「短いかもしけなかつたね」

クーズ「まあ、気にしなきや問題ない」

ツヤガ「カモネギが新しく仲間になりましたね。これで苦手な草タ
イプを克服した」

クーズ「しかし、またネタポケモンだな」

ツヤガ「色々面白い技を覚えるから小説書きやすいのだよ」

クーズ「そうですか」

ものがたりの勝利者（前書き）

ツヤガ「言つの遅かつたですがキャラ崩壊注意ですーー」

ものがたりの勝利者

クーズ「お月見山か。ズバットはピチューに任せると。イシシブテとかはドジョッちで、ゴリ押しするか」

お月見山に入る前に作戦を考える。だが原作と違えば何の意味もない
クーズ「よし持ち物も大丈夫だから行くか」

お月見山を抜けてハナダシティに行くと少しの間一ビシティやマサラタウンに行けなくなる

～お月見山の中～

クーズ「変わった所は特にないな」

だが戦闘に入る

クーズ「！？」

相手はクチートだった。見た目は可愛いが後ろの口みたいな物は噛まれるので危険である

クーズ「よし、ドジョッち。stand stage！」

台詞を変えてみた。・・・微妙である

クーズ「一気に終わらせろー・マグニチユード」

マグニチユードフ

「デジヨー...」

「チートー...」

てつべきをしてマグニチユードを防ぐ。鳴き声は・・・

「クチクチ」

クチートは、うそなきを使った。これで大体の野郎共は落とせる。
しかし今回は相手が悪かった

クーズ「デジヨツチ！なんかチャンスだ。もう一回マグニチユード
！」

マグニチユードフ

「デジヨー...」

二人とも（一人と一匹）は乙女の心なんて何にも分からぬ

マグニチユードを、もろに喰らい戦闘不能になつた

「クチーー」

クーズ「よし、どんどん進むぞ」

順調にお月見山を攻略していく。ポケモンは主に、ズバット、クチート、イワーク、ノコッチなどだった

クーズ「しかし手抜きだな」

お月見山には居なかつたが化石の所にさえ誰も居ない
謎の人物「待て！！」

クーズ「？」

謎の人物「化石は全て僕の物だ！！誰にも渡さない！！渡さないなら倒すのみ！！」

クーズ「（キャラ崩壊してるダイゴさん、きたー！！）」

ダイゴ「（石、石、石石石、石、石）」

クーズ「（なんか小声で言つてるよ。分かんない。怖いよ）」

ダイゴ「貰つたー！！」

クーズの隣にある化石達を狙つて猛ダッシュ

ダイゴ「ウゲフ！！」

だが石に躊躇大胆に転ける

ダイゴ「こんなはずじゃ。。。こんなはずじゃ。。。」

なんか地面を叩きながら悔し涙を流している

クーズ「・・・」

クーズは啞然としている

(； 。 。) こんな感じ

ダイゴ「すまない。見苦しい所を見せてしまった。私はダイゴ。どちらの地方のチャンピオンだった人さ」

クーズ「俺はクーズです。チャンピオンって凄いですね」

ダイゴ「いや、大したことないよ。鋼タイプでガチガチにすれば余裕さ」

クーズ「・・・そうですか」

ダイゴ「君は、この化石の所有者かい?」

クーズ「えっと・・・多分そうです」

ダイゴ「なるほど。これは平等にポケモン勝負と、いこうではないか!」

クーズ「(この化石は俺のなのに!?)」

ダイゴ「ああ、一対壱でいいわ」

クーズ「(いやチャンピオンの実力を見たいから、いいか) そのかわり勝つたら好きな方を選ぶでいいですか?」

ダイゴ「・・・フッ。いいだろ？」

クーズ「よし、じゃあカモネギ。stand stage-」

「・・・カモ」

ダイゴ「（カモネギか。メタグロスで余裕だな）」

説明はフラグ

ダイゴ「いけ。メタグロス！！」

「ノコッ！」

ノコッチが出てきた

ダイゴ「しまった！さつき捕まえたノコッチが！！」

まさに大誤算！！

クーズ「これが言いたいだけだろ。カモネギ、こうそくいどう、から、れんぞくぎつ」

ピチューに攻撃を当てたコンボを使う

ダイゴ「（いや、元チャンピオンの僕なら補正とかが）」

無論、ない。ノコッチは攻撃を受け続ける。れんぞくぎつは連続で
当たれば当たるほど威力が上がる

力モネギの一撃がノコツチを襲う

ダイゴ「フツ。まだまだ甘いよ。クーズ君」

クーズ「！？」

ダイゴ「ノコッチ！いかりー！」

ノーブル

いかりは攻撃を受ける度に威力が上がる。れんぞくぎりで何回も攻撃を受けていたノコッチ

「力モー！」

力モネギは壁まで一撃で吹っ飛ばされる

ダイゴ「これが元チャンピオンの実力さ」

クーズー（あの力モネギを一撃で・・・）流石ですね」

カモネギをボーラにします

ダイゴ「では、約束通り・・・2つとも貰つていいくぜ――――。」

クーズ「！？あ、ちょ」

ダイゴ「ハハハ。奪えばいんだよ。奪えば！」

かなりキャラがイカれてる。だが神様は、しつかり見ている

ダイゴ「よしメタグロスで、この壁を壊して逃げるぞ。いけ、メタ
グロス！…」

「ノコ～」

ダイゴ「またお前か！…！」

走っていたダイゴは急に止まれずノコッチにぶつかり転んだ

ダイゴ「…・僕が悪いんじゃない。化石が悪いんだ――…」

クーズ「…・あの、もういいんで、一つくださいよ」

ダイゴ「え？いいの？」

目がキラキラしている

クーズ「…・もう、いいです」

ダイゴ「キャラ。やつたー。私、化石貰ったわ。ラッキー！…」

クーズ「（うぜーーーーー）」

ダイゴ「では、僕は（ちりで）」

クーズは、じつらのかせき、を返して貰った

ダイゴ「僕はまだこの山を調べるからね。じゃあね～」

クーズ「あ～、はい。また会えるといいですね」

厄介な奴と別れられて良かつたと思ったクーズだった

ものがたりの勝利者（後書き）

ツヤガ「ダイ」「さんは、もう流石しか言い様がないね」

クーズ「色んな所でキャラ崩壊してるもんな」

ツヤガ「皆さんはサブタイトルで　ものがたりの～～　が気になつてますか？」

クーズ「ああ。 今回は　ものがたりの勝利者だつたな」

ツヤガ「実はあれ・・・」

クーズ「（なにがあるんだ？）」

緊迫した空気が流れれる

ツヤガ「何も意味が無いんです」

クーズ「なん・・・だと・・・」

ものがたりの付和雷同

クーズ「まずは『ゴールデンブリッジ』を閉鎖するか」

要するに『ゴールデンブリッジ』を攻略するという意味である

トレーナー（男）「俺の闘志、ファイヤーが！」

クーズ「なんでファイヤーがいるんだよ」

理解不能なポケモンを一人一人持っていた

クーズ「そう言えばライバルのグリーンが出てこないな」

最初のグリーンさえ無視していた。いや逃げた

クーズ「よし。やつと来たな」

マサキの家に着いた

ポケモン？「！？助けてくれや。わいを助けてくれ」

クーズ「任せな。ここでマサキを助けてつて！？」

通常はコラッタの見た目だが、ベトベターの見た目になっていた

クーズ「何これ、グロい。年齢対象無制限のこの小説はきついよ」

そして書けないので素早く装置に入れてマサキを直した

マサキ「いや～、ありがとな」

クーズ「・・・あなたは！？」

見た目がワタルだった

ワタル？「いやいや、すまんね～。最近整形して、ワタルの顔にしてもうたんや」

クーズ「（なんでしまったなんだ？）そりですかー。じゃあ助けたんでチケットを」

マサキ「チケットはジムリーダーのカスミに取られたんや」

クーズ「へ？」

マサキ「まあ、あれだ。可愛い女性には、はかっこせん、は撃てないよ。みたいな」

クーズ「（船行けないな。カスミから取り返すしかない）じゃあ、また」

マサキ「あーちょ。まつてな～」

ワタルの真似をしたがるマサキを無視してクーズはジムに急いだ

クーズ「ここがジムか？」

落書きばかりされている（夜露死苦みたいな感じ）

クーズ「嫌な。予感しかしないが、行くしかない」

暴走族A「姉御、流石です！！水のプリンセスと言われ

姉御？「ああ？違うでしょ。世界のプリンセスでしょ！？」

足で暴走族Aの背中をグリグリする

暴走族A「はあ、はあ。俺、幸せです」

そこには暴走族数人とカスミがいた

暴走族B「ん？誰だテメー！？」

クーズ「えっと…ジムの挑戦者です」

暴走族C「このカスミ様と戦いたいならリアルファイトで俺達を倒すんだな」

そして暴走族とカスミは爆笑する

クーズ「（なんだこいつら…）」

カスミ「まあ冗談はここまでよ。まあ来なさい！お姉さんがボコボコにして、あ・げ・る」

クーズ「ピチュー。今すぐ殺れ！？」

「ピチューーー！」

カスミ「あらあら。怖い、怖い。ヒトデマン、美しく決めるわよ」

「くアツ！」

ステージは水がない普通のステージである

クーズ「ピチュー。十万ボルトー！」

カスミ「（十万ボルト。ピチューのくせにやるわね）ヒトデマン。
避けて、あやしいひかり」

「くアツ！」

ヒトデマンはジャンプしてよけピチューにあやしいひかりをする

クーズ「くつ、混乱か。ピチュー、でんじは」

「ピチュー？」

でんじはがクーズに向かつて放たれる

カスミ「ハハハ。いい様ね。ヒトデマン、ハイドロポンプー！」

クーズ「ちっ、ピチュー。避けろー！」

「ピチュー？」

クーズに突進してきた。だがハイドロポンプは避けた

クーズ「うげふ」

カスミ「フフ、終わりよ。これは避けられないでしょ？なみのり！」

どこからか波が来た

クーズ「ちくしょ。ピチュー、戻れ。カモネギ、そらをとぶ」

「・・・カモ」

クーズの手を掴みながら飛ぶ

「へアツ」

だが波で来たヒトデマンにクーズが当たった

カスミ「ちょっと一トレーナーがポケモンを攻撃しないでよ」

暴走族A「そうだ。テメー、殺されてえのかー！」

クーズ「ヒトデマンが当たつてきたんだろー！」

何故かポケモン勝負ではなく口喧嘩をしている

クーズ「カモネギ、つばめがえし！」

「カモー！」

素早い動きでヒトトマンに攻撃が当たる

カスミ「...ヒトトマンが」

審判「ヒトトマン、戦闘不能」

クーズ「（いつからいた。審判よ）」

カモネギに落とされ綺麗に着地した

クーズ「よし、こままいけば」

カスミ「行きなさい。ドククラゲ！」

「ドク～」

基本、鳴き声が分からないと最初の一文字を使つ

クーズ「...ドククラゲ。暴走族になると毒が必要か」

カスミ「ドククラゲ。あやしいひかり！」

クーズ「二度も同じ手は効かないぜ。カモネギ、こまくごど！」

素早い動きでドククラゲの攻撃を全て避ける

「・・・カモ」

カスミ「なかなか、やるわね。ドククラゲ、からみつく！」

ドククラゲの長い触手が何本も来て力モネギを捕まえた

クーズ「ちつ。力モネギ脱出しろ」

だが力モネギの力ではドククラゲからは逃れられない

クーズ「（力モネギを擬人化したら薄い本が作れそうだな）」

カスミ「ドククラゲ！しほりとる」

ドククラゲの触手から力モネギの力が、しほりとられていく

クーズ「（まずい…どうにかしないと）」

カスミ「このまま終わりね」

余裕なカスミ様を暴走族の部下達は讃める

クーズ「いや、まだだ。力モネギ！エアスラッシュ」

切るまでは、いかないがダメージを貰えて脱出した

クーズ「かなり体力を持つていかれたな」

カスミ「ドククラゲ！よつかいえき」

クーズ「力モネギ、避けてから、つばめがえし！」

「・・・カモー！」

力を振り絞りドククラゲの攻撃を避けて、つばめがえし、を並べる

カスミ「なかなかやるわね」

審判「ドククラゲ、戦闘不能」

カスミ「じゃあ、私の最強のパートナーを紹介するわ。スター!!」

「へアツ!」

カスミ「スター!!。ハイドロポンプ!!」

クーズ「カモネギ。避けろ!!」

だがヒトデマンとは比にならないほど早く、避けられなかつた

審判「カモネギ、戦闘不能」

クーズ「(なんだあれ。勝てるのかよ)」

ものがたりの付和雷同（後書き）

ツヤガ「果たしてライバルはいつ出てくるのだろうか」

クーズ「まあグリーンは強いから出なくていいよ」

「ツヤガ」では書くことないので ノシ

ものがたりのサイレント

クーズ「いやなつたら。いけ！ ドジヨッチ」

「ドジヨ」

カスミ「あらら。水、地面つて相性、微妙ね。ピューは出れないのかしら？」

クーズ「いや、お前のスター＝はドジヨッチで充分だぜ」

カスミ「なめられたものね。スター＝、スピードスター＝」

ゲーム中では必中技である

クーズ「ドジヨッチ！ みずのはじり」

「ドジヨ」

スピードスターとぶつかるがドジヨッチの方が強かつた

カスミ「フフフ。スター＝に水をくれてありがとう」

威力が弱まっておりスター＝は水タイプなので喰らわなかつた

クーズ「ちっ、ドジヨッチ。マグニチュード！」

マグニチュードの攻撃がスター＝を襲う

カスミ「スター＝！－避けて、ハイドロポンプ」

ハイドロポンプがデジヨックチ田掛けて飛んできた

クーズ「よつしゃ。デジヨックチハイドロポンプに、たきのぼり」

スター＝のハイドロポンプを登る。デジヨックチが鯉になった瞬間
だつた

カスミ「…？」

クーズ「よしこけーーー！」

たきのぼりがスター＝に当たる。そして下に落ちる

クーズ「まだだ。デジヨックチ、アクアテール！－」

「デジ＝！」

落ちたスター＝に空中からの落下スピードが付いたアクアテール
がスター＝を襲う

カスミ「甘いわね。スター＝、サイコキネシス！－」

「へアッ！」

デジヨックチの体が超能力により浮いた

クーズ「（やばいな。どうするか）」

と、その時

「ピチューーー！」

勝手にボールから出てきたピチューが何かを伝えようとしている

クーズ「・・・任せろ。ピチューー！」

よく分からぬがピチューの頭を撫でる

クーズ「（この状況・・・）」

そしてクーズは答えを出す

カスミ「スター＝＝。ドジヨウチを叩き落としなさいー！」

クーズ「やりせないぜー。ドジヨウチ。みずあそび」

超能力で、みずあそび、の水が浮いた

カスミ「何がしたいか知らないけど終わりよーやりなさい、スター
ミーー！」

「へアツー！」

ドジヨウチが叩き落とされ煙が舞う

審判「ドジヨウチ。戦闘不能」

クーズ「よし。ピチュー、終わらせていー！」

ドジヨツチをしまいピューを出す

カスミ「フフフ。スター!!…あやしいひかり」

クーズ「ピュー!!十万ボルト」

しかし、あやしいひかりが先に当たる

カスミ「これでもう十万ボルトは当たらないわ！そしてポケモン交換も出来ない。私の勝ちね」

暴走族達がまたカスミを讃める

クーズ「それはどうかな？」

ピューの放った十万ボルトは、サイコキネシスで浮いていり、みずあそび、に当たる

カスミ「まさか！？」

十万ボルトは拡散した

クーズ「やべー！トレーナーを計算に入れてなかつた…！」

クーズはもちろんカスミや暴走族達も十万ボルトを喰らいつ

審判「スター!!。戦闘不能」

クーズ「なんで…審判は…無傷…」

バタツ

倒れたナチヤは最後の力を振り絞り、審判、と書いた
そして時間が過ぎ

謎の人物「HA-HAHA！ワタル。華麗に参上！」

ジムの壁を突き破りカイリューと共に入ってきた

ワタル「ん？ そうか。私はマサキとかいう奴に会いに来たのか」

周りを見渡す

ワタル「ふむふむ。さっきの壁を壊したからかな」

審判は帰っていた。他は氣絶している

ワタル「……クーズ君じゃないか。……あれ？ クズだっけか、まあいい」

ピチューと一緒に寝てるクーズを起こす

クーズ「ん~・・・!? ワタルさん！」

ワタル「やあ。お田代めかいで？」

クーズ「・・・本物か」

ワタル「まさかマサキのことを知ってるのか？」

クーズ「えーと、はい。なんか整形してワタルさんの顔になつてました」

ワタル「噂は本当のようだな。今すぐ殺りに行くか」

謎の人物「おつと。まちなはれ」

マントを靡かせて登場したマサキがきた

マサキ「別に行かんとも、わいはここに居るで」

ワタル一話が早いな

カズミー　・　・　・　ん　あ！　ターリン

マサキ「そうや。わいの彼女や」「

まさかの事実

「ガオーン」

クーズ「鳴き声、変だな」

マサキ「ちよつと面白こい」としそうやないか。我がイーブイ家族軍団! いけーーー!」

イーブイ、シャワーズ、サンダース、ブースターが出てきた

ワタル「クズ君、手伝ってくれるか?」

クーズ「勿論!よし、ピチュー、いけ!」

「ピチュー!」

カスミ「じゃあ私はイーブイとサンダース借りるわ

マサキ「よしじゃあバトルや!」

まさかの四対一の勝負

ワタル「カイリュー・ドラゴンクロール

狙いはマサキだった

マサキ「ちょ!わいを狙うな。シャワーズ、なみのり!」

なみのりに乗ったシャワーズを掴みカイリューの攻撃を避けた

マサキ「ブースター。おにぎ!」

ワタル「避けて、みずのはじつ!」

ブースターの、おにぎ、を避け、みずのはじつを放つ

マサキ「シャワーズ!みずのはじう、に突っ込むんや!」

カイリューの、みずのはじう、を喰らひ。だが特性ちょい、で水
タイプの攻撃を喰らうと体力が回復する

ワタル「ちつ。長引きやうだな」

カスミ「さあて。第一ラウンドとしまじょうか」

クーズ「いいぜ。俺のピチュー、ナメんなよー。」

ものがたりのサイレント（後書き）

ツヤガ「9月10日って、ユージュ、ユージュ、クーズになるからクーズの日」とよひ

クーズ「まあいいけど。何かするのか？」

ツヤガ「そだね。番外編にしようか」

クーズ「やつたぜ。楽しみだな」

ツヤガ「フフフ。どう料理しようか

クーズ「なんか悪人顔だぞ・・・」

番外編から飛び出した

ツヤガ「やつた。久々の番外編だ」

クーズ「本文に出ていいのか?」

ツヤガ「いいの、いいの。よし。何しようかな？」

クーズ「考えてなかつたのかよ・・ていうか撮つ」

ツヤガ「いや。数個考えてあるんだよね。1つは、ポケモンを喋らして色々。他は私とバトル。あとフラグの回収とか」

クーズ「・・色々考えてたんだな」

ツヤガ「よし、じゃあ宣伝からいこう」

クーズ「いきなりだな」

ツヤガ「私の他の小説【今 ハンター達は】の応援よろしく〜」

クーズ「(こんな大胆な宣伝は、この小説くらいだらう・・・)」

ナチヤ「といつ」とで登場!!--」

クーズ「出るな!紛らわしいから出るな!」

ナチヤ「まあ主人公同士なんだからいいだろ?」

クーズ「いや、だつて性格が・・・」

ツヤガ「うん。面倒なのとバラエティーが少ないから主人公と周りのキャラの性格は似てるよ」

ナチャ「皆さんも【今 ハンター達は】を見て確認してください」

クーズ「（もう帰りたい・・・）」

ツヤガ「まあ、今ハンは色々なキャラの練習してるから重要キャラだけ性格が似てるかな。じゃあ宣伝は、これまでにして」

そして周りが急に暗くなる

ツヤガ「皆さん、お待ちかね。9月10日、クーズの日、スペシャル回です」

スポットライトがツヤガに当たる

クーズ「おお～」

ツヤガ「今回は【銀き冷氣の力】をお送りします」

急にスクリーンが出てきた

クーズ「大変だつたぜ」

ツヤガ「これはフィクションです。（小説と関係ない）設定的にはクーズが主人公の映画のような物だと思ってください」

子供「待つて～。待つてよ～」

何か浮かんでる物体を追いかける子供

女性「あらあら。おおはしゃぎね

男性「そりや。この村の伝説的なポケモンだからな

だがその時

パ、パ、パ、パ、パ

女性「！？雪崩

男性「なに！？」

二人は必死に逃げる。だが雪崩のスピードには勝てない

子供「お母さん！お父さん！」

親の元に行こうとした子供

男性「馬鹿！来るんじゃない。俺たちは大丈夫だ。フリーージオ、ク
ーズを頼む！」

フリーージオは下に垂れている鎖でクーズを掴みに逃げた

クーズ「お父さん……お母さん……」

「現在」

「」は、雪が多く降る村。この村には特別なポケモンが住んでいると言われる

クーズ「あ～。雪が止まないな」

今、季節は冬である。冬での村では雪が止むことは少ない

クーズ「しかし、毎日毎日疲れるな」

雪かきをしてくる。やらないと道が無くなる

「ピチュー……」

雪かきをしてくるクーズにあるポケモンが近付いてきた

クーズ「よお。今日も来たか」

「」のピチューは、たまに来るポケモンである

クーズ「さよならだった。ピチュー、十万ボルト」

「ピチュー……」

十万ボルトで雪をぶつ飛ばす

クーズ「よし、雪かき終わ～」

そして木の家に入る

クーズ「寒いって。はやく薪、薪」

え～、薪に火を付けた

クーズ「ピチュー、寒いだろ？はい、プレゼント」

真っ赤なマフラーをピチューの首に巻く

「ピチュー！」

喜んでいるようだ

クーズ「良かつた。昨日頑張って作ったんだぜ」

そして暖かくなつた部屋でピチューと遊ぶ。ちなみに撫でたりすると蹴られる

クーズ「腹減つたな～。昼飯作るか」

昼飯を作るために厨房に行く。しかし、この時誰も知らない。強大な敵が近付いてることを

クーズ「ふう～。お腹いっぱいだな」

昼飯を食べて満足なクーズとピチュー。その時

ドーン

クーズ「！？なんだ、この音は」

急いで外にでる。村長の家あたりから煙が出ている

クーズ「嫌な予感しかしないな。ピチュー行くぞ」

「ピチュー！」

クーズの肩に乗り、赤いマフラーを靡かせながら行く

村長「・・・お前は

謎の人物「よお。腐れ親父」

村長を親父と言つた少年は髪の毛が銀髪で逆立つてゐる。ドクロなどが模様の服や不吉なアクセサリーを着けている

村長「お前は、もうこの村と関係ないはずじゃ」

謎の人物「ざんね〜ん。俺の入つてる組織から命令されてね

村長「命令じやと？」

謎の人物「ああ。この村に住んでいる、イッシュ地方でしか見られないポケモン。フリー ジオを捕まえにな！」

少しの間、村長は何かを思い出すよつと止まった

村長「あれは村の神様のような物。ナチャ、お前なんぞに渡すものか。いけ、マンムー！」

ナチャ「ヒヤハハハ。雑魚がほざくな。殺れ、ブーバーン！」

2体のモンスターが対決する

クーズ「くそ。何度も爆発が起つてるな」

必死に村長の家に行こうとしてるが、なかなか着かない

村長「くつ・・・」

ナチャ「どうしたジジイ？もう終わりか？」

ブーバーン、一匹で村長の手持ちを全て倒した

ナチャ「んじや、終わりだな。死ね」

ブーバーンの腕が村長に向けられる

謎の人物「待て――――！」

ナチヤ「ん？ まあいい。ブーバーン、かえんほうしゃ」
かえんほうしゃをするために腕から火が漏れる

謎の人物「やるーー・ピチュー、十万ボルト」

「ピチュー！」

ナチヤ「ブーバーン。避けろ」

直ぐ様、避け体勢を立て直す

クーズ「テメー。誰だ！？」

見た目から不良である

ナチヤ「・・・お前、クーズか」

クーズ「・・・もしかして、ナチヤか？」

ナチヤ「ああ」

クーズ「良かつた。で、爆発は何だつたんだ？」

ナチヤ「ククク」

笑いをこらえてるが無理だつた

ナチヤ「ハーハハハハ！馬鹿だな！クズ。俺が全部やつたんだよ」

クーズ「なつー？」

ナチヤ「俺はあの頃の俺じやない。もひ誰にも邪魔させないー。」

クーズ「・・・」

村長「クーズ」

村長がいつもより老けて見える

ナチヤ「おいおい。まさか話していないのかよ。ありえねえな」

クーズ「村長・・・？」

村長「いつか話さなくてはと思っていたのじや。これは天気が快晴のあむ田のじじゅ」

番外編から飛び出した（後書き）

ツヤガ「もう普通にこの設定でポケモンが書きたかった」

クーズ「そんなこと言つなよ。他のキャラが寂しくなるだろ」

ツヤガ「そつにえは都合上ナチヤを出しました」

クーズ「まあキャラが全然違うけどね」

ツヤガ「いや皆、設定では映画を撮っている設定なので、あのキャラはナチヤが作ったキャラになりますね」

クーズ「紛らわしい」

ツヤガ「あーちなみに本文にナチヤが出たのは、このためだよ。ただの宣伝じゃなかつたんだよ」

クーズ「ああ、書いた後に思い付いた、といつことが文章で分かるぞ」

ツヤガ「色々大変なんだよ。小説、書くのもさ」

番外編から四苦八苦

「これは天気が快晴の日。今、村長とナチヤはある場所にいる

村長「ナチヤよ。お前も知つてると思つがこの村は地球の中心部にある」

ナチヤ「ああ。だから強いエネルギーがあると反応して天変地異が起るんだろ」

村長「やつじや。・・・だから」

ナチヤ「・・・？」

村長「すまないな」

いきなりマンムーでナチヤを踏み潰そうとした

ナチヤ「（山に登ったのは、このためか）・・・まあ分かつてたことだ」

マンムーの攻撃を避ける

村長「お前が生きていると、いつか世界が破滅するーそれを知つてゐるだろ」

ナチヤ「だからって自分の息子を殺すのかよ・・・。いけ、ブーバー！」

「ブーバー！」

村長「・・・やるしかないか」

二人の激しい争いが山で起きる

クーズ「までーーー！」

今、クーズはフリージオを追いかけている

父親「フリージオも何かを感じてここに来たのかな？」

母親「さあ？でも村の守り神よ。追い出せないでしょ」

父親「追い出す気はないよ。でも不思議でさ」

村長「終わりじゃな」

ブーバーはやられている

村長「・・・本当にすまんな」

マンマーの大きな足がナチヤに降り下ろされる

ナチヤ「（死にたくない！ーーー）」

ナチヤはまた避ける

村長「無駄じやー。」

だがその時

“ガーハーハーハーハ”

ナチヤ「（雪崩！？よし逃げるチャンスだ）ブーカー、お願ひだ。
かえんほうじゅやーー！」

村長に向かつて、かえんほうじゅが放たれる

村長「へつ。逃げられたか

マンムーでガードしたが居なくなつていた

村長「わしも逃げないと危ないな」

そして雪崩はそのままクーズの両親を襲いつ

クーズ「お父さんーーお母さんーー。」

ナチヤ「まあ、そんな訳でクーズの両親を殺したのはジジイだ

正確に言つとナチヤも関係するが気にしない

クーズ「・・・

村長「・・・クーズ

ナチヤ「ヒヤハハハハ。信頼してた奴が両親を殺して未だに話してなかつた。楽しいな！」

しゃべり方は鬼柳を参考にしてください

クーズ「・・・確かに村長は俺の両親を殺したかもしれない」

ナチヤ「かも、じゃねえ。殺したんだよ」

クーズ「だが今まで困つたことが助けてくれた。俺の両親の代わりをしてくれた。村長は充分に罪を償つた！！」

ナチヤ「ああ？それがどうした？殺したことには変わんねえよ」

クーズ「俺はお前のよつて自分の罪を認めないような奴の方が許せない！勝負だ、ナチヤ！！」

ナチヤ「は～あん。まあ、そんな考えじや無意味なんだよ。いけ、ブーバーン

「ブーバー」

クーズ「いけ！ピチュー

「ピチュー！」

ナチヤ「燃え死きな。ブーバーン、かえんぼうじゅー。」

ターゲットのピチュードに腕を向ける

クーズ「ピチュード。十万ボルト！」

かえんぼうじゅーと十万ボルトがぶつかり大きな音と煙が発生する

クーズ「さらに十万ボルト！..！」

ナチヤ「ブーバーン。避ける」

煙の中から出てきた十万ボルトを避ける

ナチヤ「ブーバーン、サイコキネシス！..！」

ピチューの体が宙に浮く

クーズ「ぐつ」

ナチヤ「どうした？？何もしないなら殺るだけだ」

ブーバーンの腕がピチュードに向けられる

クーズ「やらせるか！..ピチュード。かえんぼうじゅーと自分に、でんじはー！」

ブーバーンの放たれた、かえんぼうじゅーはピチュードの反発避けにより避けられる

ナチヤ「面白いな。だがお前の勝ちはない」

クーズ「（確かに。ピチューじゃ無理か）」

「ピチュピチュー！」

何か怒つているような感じだ

クーズ「・・・やうだな。よしピチュー。でんこいつつか」

左右に素早い動きをしながらブーバーンに近づく

ナチヤ「ハハハ！ブーバーン、ふんえん！！」

ブーバーンの肩などから火が勢い良く飛び出る

ナチヤ「なに！？」

高速で移動しているピチューがブーバーンの攻撃を避けている

クーズ「流石！ピチュー、十万ボルト！」

「ピィチュー！」

ギリギリまで近づき十万ボルトをブーバーンに当てる

ナチヤ「ちつ。ブーバーン、えんまくー（あのピチュー。普通じゃねえな）」

「ブーバー」

えんまくにより周りが見えなくなる

クーズ「（じりあるか）」

だが考える余裕は無かつた。黒煙からブーバーンが飛び出してきた

ナチヤ「ブーバーン、かみなりパンチ」

クーズ「！？ピチュー、避ける」

「ピチュー！」

「ブーバー！」

攻撃より回避の方が少し早かつた。ピチューはジャンプして避ける

ナチヤ「まだまだ！左手でほのおのパンチ！」

クーズ「ピチュー、でんじは！」

反発によりピチューは更に高く宙に浮く

ナチヤ「ハハハハ。ブーバーン、ほのおのパンチの威力を乗せて、
かえんほうしゃ！…」

ほのおのパンチの火をかえんほうしゃに混ぜる

クーズ「つ！？威力が」

とてもピチューじゃ太刀打ちできない威力のかえんほうしゃがピチ
ューを襲う

ナチヤ「空中じゃ身動きが取れねえし、技を撃つた直後だから隙だらけだぜ」

クーズの手持ちはピチューしかいない。ピチューが負ければクーズも負けになる

ナチヤ「終わりだ！！燃えちまいな！！！」

ピチューがかえんほうしゃに当たる寸前

「ピロリロ（機械的な音）」

ナチヤ&・クーズ「！？」

れいとうビームがブーバーンのかえんほうしゃを相殺した

ナチヤ「あいつは・・」

クーズ「助けに来てくれたのかフリージオ！」

そこには村の守り神であるフリージオがいた

番外編から四苦八苦（後書き）

ツヤガ「ふう。だいぶ更新が遅れましたね」

クーズ「なんでだ？」

ツヤガ「言い訳になりますが、忙しいと他のゲームをしてたりと…」

「

クーズ「毎日少しでいいから書けよ…」

ツヤガ「いや、だつて。ね」

クーズ「分からなからな」

ツヤガ「ちえ、んじや今回の話を。ブーバーンの鳴き声が個人的に
読んでて笑いました。そしてフリーージオの鳴き声は…」

クーズ「まあ、アニメ見てないから鳴き声は難しいと思つぜ」

ツヤガ「気になら負けでいいですね。次回も番外編で…す」

それは結晶。それは冬。それは化身。それは・・・

クーズ「フリージオ！来てくれたのか」

「ピロリロ」

クーズの顔にスリスリしてくるが冷たい

クーズ「（冷て！）フリージオ。分かったから、今バトル中

親切にナチヤは待っていた

ナチヤ「まだか？」

こちらはブーバーンの熱を使い温まっていた

クーズ「するつーてか、ピチューも」

ピチューも寒かつたのか温まっていた

ナチヤ「おし、んじや。仕切り直しだ！」

両者位置につく

ナチヤ「そうだな。テーマにチャンスをやろう。フリージオとピチ

ユー。一匹使え」

クーズ「・・・分かった。だが、そしたら負けないぜ」

ナチヤ「出来るもんならやつてみな!!ブーバーン、かえんほうじ
や」

ピチューを狙って、かえんほうじゅが放たれる

クーズ「フリージオ。れいとうビーム・ピチュー、十万ボルト!」

技マシンの汎用技がバンバン出できます

ピチューの十万ボルトはかえんほうじゅを相殺、隙ができたブーバーンにれいとうビームが迫る

ナチヤ「ブーバーン。ふんえん!!」

至るところから炎が飛び出る。そしてれいとうビームを相殺し、ピチュー達に攻撃をする

クーズ「技と技のぶつかり合いか。ピチュー、十万ボルトで打ち消せ!!」

ふんえんの炎を、また相殺する

クーズ「フリー ジオ。ブーバーンにきりぞく!」

特殊型のフリージオには、これをやつてはいけない（本家のゲーム）

ナチヤ「死にに来たか！ブーバーン。ほのあのパンチ

ブーバーンの腕が炎に包まれフリージオを殴る

だが手応えが無かつた

ナチヤ「！？消えた」

クーズ「フリージオ。れいとうビーム！！」

いきなりブーバーンの後ろにフリージオが現れる

ナチヤ「なに！？」

ブーバーンは反応出来ず、れいとうビームを喰らつ

クーズ「フリージオは氷の結晶だぜ」

説明しよう！フリージオは設定で熱すぎると水蒸気になる能力（？）を持つている

ナチヤ「なるほどな」

「ピチュー」

二人とも納得したようだ

クーズ「フリー・ジオ！そのまま、れいとうビームで決める！」

がら空きのブーバーンに、れいとうビームが襲つ

ナチヤ「甘い、甘い。ブーバーン、ふんえん」

れいじゅじームをかき消し、フリージオの回りに、ふんえんが舞う

ナチヤ「水蒸氣のままじや自由自在には動けないだろ?」

ふんえんの檻にフリージオは捕まる

クーズ「ちつ。ピチュー、十万ボルト!」

ナチヤ「そらそら。お遊びは終わりだ!! ブーバーン、だいもんじ
!」

かえんせつしゃの比にならない威力のだいもんじがピチューを襲う

ナチヤ「ハハハハ。苦しめ……そして死んでいけ!!」

急に空が明るくなる。だが急に気温も高くなる

村長「不味い。ナチヤの力に地球のエネルギーが反応した!」

クーズ「くつ。雪の状態から、こつきに口罷つかよ」

ナチヤ「ひつや好都合だな。ブーバーン、止めの一撃をお見舞いしてやれ」

「ブーバー」

だいもんじを喰らって動けないピチューに距離のかえんせつし

やが放たれようとしている

フリージオは日照りによる気温上昇とブーバーンの炎で固体に戻れない

「ピッ・・・チユ」

ナチヤ「まあ、普通のピチューより強かつたぜ。楽に逝きな」

しかしピチューには必ず守ってくれる王子様がいる

クーズ「やらせるかーーー！」

ブーバーンの元にダッシュする

ナチヤ「おいおい。何言つちやつてんの？ブーバーン、やれ」

クーズ「！？」

終わりが近いと時は早く進むか遅く進むか、両極端しかない

中間なんて存在しない。今回も例外ではない。時は遅く進む

(ピチューが殺られる。どうにかして助けないと・・・。だが俺には力がない、ピチューを助けられる力が・・・ない)

村長「こ・・・これは！？」

天気がまた変化する

ナチヤ「クーズの力に反応したか！？」

天気は一転し、あられ状態になる

クーズ「・・・フリーージオー！」おりのつぶて

小さな氷は素早くブーバーンを襲う。怯んだ所でピチューを奪還した
ナチヤ「ちっ。だが天氣でビリがなると思つたよ。ブーバーン、
一撃だ。一撃で終わらせる！オーバーヒートーーー！」

これまでにない炎がブーバーンから迸る

ナチヤ「・・・」の世の万物を凍らせる冷氣ーフリーージオ、ぜつた
いれいどーーー！」

「ブーバー！
「ピロリロ！」

紅蓮の炎と蒼霞の氷がぶつかり合つ

ナチヤ「くつそ・・・」

フリーージオのぜつたいれいどがブーバーンのオーバーヒート呑み込みブーバーンを凍らせる

クーズ「勝つたんだよな」

自分の家でボーッとしている

そこには氷の結晶とシンデレな雷がいる

あの戦いに勝利したクーズ。だがまだ解けてない謎はある

クーズ「この手の話はや。終わらせ方が分からないよな」

「ペチコ」「ペロコロ」

番外編から床暖房（後書き）

ツヤガ「2ヶ月投稿してませんでしたね～。色々やりたいことがありますので早く投稿出来ません

そこは謝ります。あと今口投稿したのは誰かさんが投稿したのを、たまたま見たからです

では ノシ

ものがたりの美

今、カスミとクーズ。マサキとワタルでバトルをしている

相手は2体。こつちは1体だが・・・

クーズ「（サンダースには電気技が効かない）なら修行の成果を見せる時が来たようだな！」

「ピチュー！」

ピチューは赤い鉢巻きを頭に巻く

カスミ「そんな装飾品付けたって無駄よ。サンダース、めざめるパワー。イーブイ、すなかけ」

タイプが分からぬ、めざめるパワーに、すなかけがピチューを襲つ

クーズ「師匠の教わったことを実戦するときだ。ピチュー、避けろ！」

ピチューは目を瞑る

師匠「目で感じるのはない！第六感、心の目で感じるのだ！」

カスミ「！？」

大量のめざめるパワーと、すなかけがピチューを襲うが上手くかわす

クーズ「師匠の教わったことは無駄じやなかつたんだな」

「これは洞窟を抜けてすぐ」

謎の人物「おい！待つんだ。そここの少年」

クーズに話しかけてきたのは柔道着を来ている、からでおつだ

クーズ「たしかファイヤーレッドだと技を教えてくれるんだっけ
メガトンパンチとメガトンキックを教えてくれる（一人だが）けつ
こう無駄な技、教えの人です

からでおつ「そんのはどうでもいい。それより、そのピチュー。
そいつは私の予想ではかなり伸びる」

クーズ「え？ 背が！」

「ピチュー」

ピチューは自分が背が高くなつた時をイメージしている

からでおつ「ちがーう！ 力が強くなるといつことだ！」

クーズ「ですよね～」

からであります。「どうだ？ ちょっと一緒に修行してみないか？」

クーズとピチャューは田舎を合わせる

クーズ「まあ急ぎ旅じゃないので、いいですよ」

その日からクーズと、からであります（師匠）との修行の日々が始まった。ある時は泣いたり。ある時は苦しんだり。ある時は不味くて吐きそうだったり

覚えてこるのは食事のことばかりだ

そして長い師匠との修行が終わった

クーズ「この二日間。一年間に感じた・・・」

食事が相当不味かつたらしく死にそうである

師匠「ふむ。もう教えることはないな。よしクーズよ。お前のピチャューは一回りも一回りも強くなつた」

「ピチャュー？」

見た目は全く変わっていない

師匠「これを持つていけ」

師匠のハチマキを貰つた

クーズ「これは？」

師匠「お前と私の修行をいつでも思い出すためだ」

クーズ「… 師匠。 ありがとな！」

クーズ「あの食事。今、思い出しても吐き気がする…」

だがピチューは確かに強くなっている

カスミ「何が修行よ。サンダース、でんじうせつか」

クーズ「やつてやれ。ピチュー、マッハパンチ！」

格闘小説になりそうな予感がする

ピチューのマッハパンチがサンダースに直撃する

でんじうせつかの威力もあって、かなりのダメージだ

カスミ「…なら、イーブイ。だましつか」

ピチューに攻撃をするフヨイントし攻撃する

クーズ「ピチュー、カウンター」

イーブイの攻撃に反応してピチューはカウンターを放つ。そしてイーブイは吹っ飛ぶ

カスミ「何よ、あのピチュー。物理技が全然効かない」

クーズ「よし、止めた。ピチュー、十万ボルト！」

イーブイに放たれる

カスミ「・・・！？まだ勝ち田はある。サンダース、イーブイを守つて」

サンダースの素早さは異常だ。イーブイを守るため十万ボルトを受ける

クーズ「くつ。ちくでんか」

カスミ「見せてあげるわ。イーブイのとつておきの技を！イーブイ、とつておきー！」

駄洒落っぽい言葉を言いながら攻撃する

クーズ「ピチュー、避けろ！」

また目を瞑る

カスミ「させないわ。サンダース、十万ボルト！」

ピチューはとつておきの技に集中してたため十万ボルトを喰らう。

そして集中力がされた

クーズ「！？ピチュー」

イーブイのとつておきが直撃する

「ピチュー」

カスミ「集中しないと避けられないよつね。せりに集中できるのは一つの技だけ」

クーズ「（完全に攻略されたな。びつする）」

ピチューは辛うじて立つ

カスミ「終わりよ。イーブイ、とつておき。サンダース、十万ボルト」

「ブイー」「サンダー！」

一匹の技が放たれようとした時

ワタル「カイリュー。はかいこいつせん」

カスミ「！？」

ワタルのカイリューの、はかいこいつせんで一匹は一気に戦闘不能になる

ワタル「遅くなってしまったな。クズ君、後始末は僕がやるよ。だ

から出でていこよ

クーズ「いや、でも」

ワタルはマサキを抱えていたがマサキは原型を止めてない

クーズ「（ああ、やばいな）わかりました」

そしてピチューを連れて急遽ジムを出た

クーズ「あ！バッチ」

確認したらいつの間にか手に入れている

クーズ「ホント、このゲーム。よく分からぬよな」

そしてクーズはポケモンセンターに行き、次の町に行くのを備えた

ものがたりの美（後書き）

ツヤガ「ふう。疲れました。気分で投稿するので次はいつになるかな」

クーズ「ていうかピチューを強化しすぎじゃないか？」

ツヤガ「大丈夫です。ドジヨツチと一緒に重要な時でしか補正は効かないから」

クーズ「・・それならいいけど」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8394v/>

ポケットモンスターの可能性

2011年11月6日11時23分発行